作文部門入賞作品

内閣総理大臣賞

おばあちゃんの宝物

三重県 学校法人三重高等学校三重中学校三年 大西 眞廉

「ただいま、おばあちゃん。」

僕は夏休みを利用して、遠方で一人暮らしをする祖母に会いに行った。

久しぶりに会った祖母は、

「お帰り。遠くから来てくれてありがとう。」

と微笑んで出迎えてくれたが、何となく元気がないように感じた。僕は思わず、

「おばあちゃん、体調でも悪い？」

と聞いてしまったが、

「大丈夫だよ。歳だから足腰は痛いけどね。」

と、祖母は笑いながら答えた。

そんな祖母を見て、僕は、何か手伝うことはないかと聞いてみた。すると、

「ありがとう、大丈夫だよ。ご飯ができるまで奥の部屋で休んでいて。」

と祖母は言った。僕は一度、奥の部屋へ行ったが、祖母が気になり、すぐに祖母がいる台所へ戻った。ご飯の準備で、せかせかと動き回っている祖母を見て、僕は、

「ご飯、炊こうか？」

と言ってみた。すると、

「えっお米とげるの？」

と、祖母はびっくりした様子だったが、僕が母から特訓を受け、炊飯器をセットできるようになったことを話すと、納得してくれた。

早速僕は、米びつがある納戸へ行くと、米びつの隣に大きな米袋があるのに気付いた。その袋を開けてみると、中には玄米が入っていた。僕は、見慣れない玄米を思わず両手ですくってしまった。手の中の玄米は、小石が混じっていて、食べられる米ではなさそうだった。僕は、米びつの中の精米されたきれいなお米を持って台所へ戻った。

そして、

「米びつの隣にあるお米の袋、あれ何？」

と祖母に聞いた。すると祖母は、

「あれは宝物だよ。」

と優しく笑った。僕は、『宝物』の意味が分からず不思議に思い、詳しく聞いてみると、それは、二年前に他界した祖父が、亡くなる前の年に収穫した、最後の米だった。

祖父は兼業農家で、会社を定年退職した後は、少しだけ米を作っていた。しかし、その年は台風が直撃し、全ての稲が倒れ、水に浸かって全滅してしまったらしい。祖父の心中は、僕の想像より遥かに辛かったと思う。通常、一度倒れてしまった稲は、処分してしまうらしいが、祖父は諦めきれず、倒れた稲をできる限り起こして、収穫したそうだ。祖父はこの重労働を一人でこなし、二俵弱の米を収穫することができた。もちろん、その米は売り物にはならない。しかし、どうしても破棄できなかった祖父の気持ちは、痛い程よく分かる。そして、祖父が最後に収穫した米を『宝物』と言う祖母の真意も理解できた。

その話を聞いた僕は、祖母のために、この宝物でおにぎりを作りたいと提案した。

「これは、美味いお米じゃないから…。」

と、祖母はためらったが、僕は食い下がった。

「宝物のお米で、元気になってほしい。」

僕がそう言うと、祖母はニッコリ笑った。

僕は早速、宝物を新聞紙の上に広げ、祖母と一緒にゴミなどを取り除いた。細かい石などが混じっていて、とても面倒な作業だったが、祖母との会話は弾み楽しかった。

異物を取り除いた玄米を精米機にかけて、僕はその米をといで、炊飯器で炊いた。

ピピーと、炊き上がりを知らせる音を聞き、祖母と一緒に炊飯器の蓋を開けると、湯気がホワーと上がり、美味しそうな香りが漂った。僕は、炊き立てのご飯に、祖母が用意してくれた、梅干しや昆布を詰め込んで、おにぎりを握った。不格好な形のおにぎりがいくつもできた。それを見た祖母は

「美味しそうだね。ありがとう。」

と言ってくれて、食卓に並べた。

祖母がおにぎりを一口食べた時、僕の頭の中におじいちゃんの笑顔が浮かんだ。そして、祖母が少しだけ元気になったような気がした。

※全ての作文作品は原文どおりを基本にしますが、明らかな間違いは手直ししました。